

楽器作りは 職人の耳が成す

和太鼓、三味線、琴など、日本の伝統楽器を作っている人もいます。田澤弘之たざわひろゆきさんは、藤野で和太鼓の革張りなどを手掛けています。太鼓はいろいろなないこ場の師範や生徒の練習、学校行事、町内会の盆踊りなどに使われています。

太鼓の革は牛の皮から作られます。裏面に残った毛や脂を取り除く「二べ取り」をした革を太鼓の「胴」に乗せ、革の端を縄で引く張って床に固定。革の面を上から大きな金づちでたたいて伸ばしながらがっちり締めていきます。

時々バチで試し打ちをし、微妙に変化してくる音の高さを聞き分けながら革の張り具合を確かめます。

「太鼓は革が命。張る前にカンナをかけて均等な厚さにしないと、音の響きの良い太鼓は生まれません」。



1

こうして作る太鼓も、全く同じ音色のものには仕上がりにません。それが手仕事ならではの、楽器の個性となるのです。

田澤さんは太鼓を載せる「足」も作っています。演じ手の背丈やたたき方の癖など、その人に合った使いやすいものにするため、角度や高さを少しずつ調整しながら仕上げます。

自らも太鼓を演奏する田澤さん。太鼓の響きを体で感じ、良い音を知り尽くしているからこそできる技なのです。



2



3

- 1 革を少しずつ締め上げる
- 2 革をほどよい力の加減でたたく
- 3 二べ取り用の特殊なカンナ

地域の中で私たちのためがんばっている職人たち。美味しいパンも豆腐も、素晴らしい楽器の演奏も、こうした人たちの心と技がこもっているからこそ味わい深く、楽しめるのではないのでしょうか。

広告欄

